

アメリカもその後訪れなかったわけではないが、最初のアメリカとの出会いのように自動車に驚いたり、スーパーマーケットではじめて買い物した体験、ティッシュペーパーをはじめて見た時のような驚きはもうなかった。その意味では現代の日本は1960年代のアメリカにあまりにも似ている。

定年退職後、NHK インターナショナルにお世話になっていた時、若い人とアメリカ出張することになったとき、「小林さん、ニューヨークはプラザを取っておきましたよ」と聞いた時はびっくりした。プラザホテルはあのプラザ合意で有名な一流ホテルである。私は留学中一度もそのドアをくぐったことすらなかった。それが「プラザは日本航空と提携しているから、JALで行くと割引があるんですよ」ということであった。

プラザホテルについては後日談があって、私の部屋のエアコンが夜中に猛烈な音をたてて壊れた。やはり、いいホテルだけど古いのである。翌朝、テーブルの上にあったマネージャーあての封筒に「このホテルは品格のあるホテルだと聞いていたが、夜中にエアコンが吠えた」と書いて投函しておいた。東京へ帰ってしばらくすると、マネージャーから自宅に手紙が来て、「調べてみたところ、あなたの部屋のエアコンは確かに故障していました。まことに申し訳ありませんでした。つきましては、次回ニューヨークへおいでになるときは、この手紙をご持参いただければスイートルーム(suite room)にアップグレードさせていただきますから、これからもごひいきにさせていただきたい」ということであった。次回この手紙をもって再びプラザホテルを訪れると、セントラルパークに面した小さいながらもスイートルームを用意してくれた。そして、そこに一人で泊まった。朝飯は和食も用意されていたが、みそ汁はお椀ではなく、チューリンという西洋のスープを入れる器でサーブされていた。これでは口元にもってきてズーッと音を立てて啜るわけにはいかない。ヨーロッパ人も多く泊まるホテルだから、スープを音をたてて飲まれると困るのであろう。

娘がまだ結婚する前、家族を連れてニューヨークに行ったこともあった。パパが若いころ学んだニューヨーク大学やグリニッジビレッジを見せるためであった。母娘はミュージカルに夢中で三日三晩ミュージカルを見に行っただ。私は「キャッツ」はもう見ていたし、「美女と野獣」はあまり興味がわかなかったので、「オペラ座の怪人」だけつきあった。娘は案内書をよく読んでいて、ティファニーにも行きたいという。ティファニーにも私は前を通っただけで入ったことはなかった。そこでは、奮発して娘にペンダントを買ってやった。妻にはプレゼントするのを忘れていた。

私がアメリカに留学していた1960年代から半世紀が過ぎた。アメリカは変わった。そして日本も変わった。初任給は約10倍になった。円ドルの交換レートも3倍になった。ドル換算でいうと日本人は30倍金持ちになったということであろう。昔はニューヨークの街角で東洋人を見つけたら、カメラを持って眼鏡をかけている人は日本人、カメラを持っていな

い人は中国人などといわれていた。カメラとトランジスターが日本の主な輸出品だった。

60年代の初めには日本から輸出した箱型ダットサンが、アメリカのハイウエーでエンジンが焼けてしまったというような話を聞いていた。それが今は日本車がアメリカのハイウエーを席卷しようとしている。日本には1964年のオリンピックまで高速道路さえなく、マイカーを持っている人は金持ちだけだった。車を持っている人は運転手が雇える人で、自分で運転する車はオーナーカーと呼ばれていた。戦後進駐軍がアメリカの車をもって舗装もされていない田舎の道を走るようになったとき、アメリカ人は消防車のような真っ赤な車に乗っていると、女も車を運転しているとかいって驚いたものだった。そのころ車といえばベンツで黒かあずき色と決まっていた。

日本製品は安かろう、悪かろうだったものが、安くて、良くて、世界中によく売れるという時代になった。デトロイトの自動車工場は閑古鳥が鳴いて、失業者が続出するようになった。アメリカは貿易赤字になり、日本製品のダンピングが原因だとして、日本がターゲットにされた。日米貿易交渉の結果、日本の自動車工場がアメリカに建設されるようになった。デトロイトはユニオン（労働組合）が強いからといって、日本の自動車工場は賃金の安い南部に建設された。

日本にもアメリカのハンバーガーが進出した。マクドナルドの第1号店は銀座の三越であった。日本人もアメリカ人のように背が高くなった。私は今でも家でクリネックスのティッシュペーパーをみるとアメリカを思い出す。

今アメリカは大幅な貿易赤字をかかえて、中国のハーウェイをターゲットにしている。やがて、ハーウェイがアメリカに工場を移すなんていう日が来るのだろうか。

アメリカ留学のことを書こうと思い立って、かくも鮮明に記憶がよみがえってくるのは驚きだった。齢八十を過ぎて、わずか一年間の体験がこれほど鮮明によみがえってくる国はほかにない。私はアメリカ人が好きだ。あけっぴろげで、誰とでも同じ目線の高さで話し、友達になれる。大統領でも Mr. President と呼べばいい。イギリスならばさしずめ Your Majesty とか Your Highness とでも呼ばなければいけないところであろう。しかし、あのトランプ大統領の言葉遣いはどうだろう。ニューヨークのトランプタワーの金ピカの建物はどうだろう。

アメリカはピューリタンの国だという。フランス人のトクビルは『アメリカにおける民主主義』でアメリカは平等の国だとしている。しかし、それはフランス革命まえの身分制度が残り、貴族制度の残るフランスに比べて市民がみんな平等であるということであろう。

アメリカは自由の国だという人もいる。アメリカは資本主義の競争社会でもある。力の最大限の発揮を競い合い、強者が勝利するという社会は自己責任の社会でもある。未だにメディケア法案が成立しないのは、病気のとときの備えは自分自身が必要ならば民間の保険会社に保険をかけて、自己責任ですればいい。国家のお世話になるのは共産主義だ。政府は小さいほどいい、という考えがあるからだろう。

アメリカ人はサクセス・ストーリーが好きだ。石油王ロックフェラー、鉄鋼王カーネギーのサクセス・ストーリーからスチーブ・ジョブズまでその人気は今も絶えない。トランプ大統領の人気も不動産王としての成功によって支えられている。アメリカは若者が夢を追える社会だ。今でもポケットに 100 ドル札一枚しかない若者が画家を目指して、あるいはダンサーやミュージシャンを目指してやってくる。掃除夫からはじめて夢を追い続けることができるだけが生き残れる。不幸にして成功しない人は自己責任である。社会は先取の気性に富んだ社会ではあるが、格差社会でもある。その過酷さに耐えられる人がアメリカ人だともいえる。Dreams Come True を信じられる心をもっているのは若者だけだ。

アメリカ人は人生をルーレットのようなものだと考えているのではあるまいか。運がよければ必ず一度はあたる。アメリカ人は挫折を恐れない。ボクサー志望の少年ロッキーを主人公とした映画に人気があるのも、アメリカ人の心性に訴えるものがあるからであろう。成功には努力も必要だが運も必要である。1840 年代のゴールドラッシュにカリフォルニアを目指した 49'er のハングリーな精神が今も生きている。日本人はひたすら奮励努力するが、アメリカ人の努力には悲壮感がない。肩の力を抜いて“Take it easy.”といえるのがアメリカ人だ。“How to succeed without really trying.”などといえる楽観主義がどこかにある。

ブロードウェイはアメリカ文化の上澄みにすぎない。本当のアメリカはオフ・ブロードウェイにある。グリニッジビレッジからはい上がっていくのがアメリカ流だ。ハーレムなどで町を歩いていると公園や道路にバスケットボールのゴールポストがあり、子どもたちが無心にシュートの練習をしているのをよく見かける。そうしたなかからマイケル・ジョーダンのようなスターが育っていくのである。スターになれなかった少年は星の数ほどある。つぶれてしまったバスケットボール・チームも数えきれないほどある。野球でも二軍で鍛えた選手のなかから一握りの選手だけが一軍にあがって行く。挫折を恐れない心が若者にはある。挫折こそが人間を鍛える。

それは会社でも同じで、パンアメリカン航空のようにかつてはアメリカのフラッグ・キャリアだった大会社も、今ではなくなってビルだけが残っている。パンナムビルといえば、私が留学していた 1960 年代にはマンハッタンのランドマークの一つであり、世界一高い商業オフィスビルであり、屋上にはヘリポートもあった。それが現在ではメトロポリタン・ライフ生命保険会社のビルになっている。パンアメリカンといえば、かつて相撲の表彰式で日本支社の社長が「ヒョーショージョー」といって優勝者に賞状を渡していたのを思い出す人もいるのではなかろうか。倒産する会社もあれば、それを踏み台にして伸びていく会社もある。民間会社の倒産は社会全体の経済成長のなかで吸収される仕組みだが、リーマンショックのように社会全体が経済破壊に見舞われることもある。不確実性の世界で、運がよくなかったのである。Good Luck! それがアメリカンスタイルだ。そして、それがベンチャー精神につながっている。アメリカの底辺の広さを見ずしてアメリカを見たというなかれ、である。人生のうちに二度も幸運が訪れて金持ちになったら、老後は引退してフロリダあたりでゆっくりと人生を楽しむ、というのがアメリカ人の理想だ。

明治維新から 150 年を経過した令和の時代でも、アメリカにはまだ見るべきものがたくさんある。令和の時代に遣米使節団を送るとすれば、金融資本主義の大本山である証券会社と広告代理店を訪れるべきであろう。一秒間に数千回行われるという株の電子取引を、この目で見れるものなら見てみたいものである。広告代理店、商品の広告を通じて流行をつくりだすばかりでなく、大統領の選挙キャンペーンの演出、戦争のための世論形成まで何でも引き受けている。巨大な資金を投入する民間の研究機関の活動も注目すべきであろう。大企業といえども開発に投資しないと、競争に負けてしまう。まさに、invest or perish である。アメリカ経済の底知れぬ力は研究開発にある。

しかし、疑問もある。マックス・ウェーバーによれば、禁欲的なプロテスタントが貯めたお金が元手となって産業資本主義は発展してきたという。しかし、今や金融資本主義の時代となり、物を作るよりもお金がお金を生む仕組みだけに熱中している。消費は美德なりとして、お金を使って消費を盛んにしないと世の中の景気が悪くなるという。金融は産業に血液を供給するのではなく、金融が栄え、産業が衰退しているように見えるのは偏見だろうか。

そして最後に、ニューヨーク五番街に屹立する金ピカのトランプタワーを訪れるべきであろう。トランプタワーこそ、現代アメリカの富と権力の象徴である。

トランプ大統領も日本に使節団を送るとすれば、戦争時や京都の日本文化だけでなく、日本の健康保険制度と長寿社会を研究してほしい。アメリカには医療保険に入っていない人が 3000 万人もいるという。自分の健康を守るのは自己責任だという考え方だ。しかし、コロナのような伝染病は個人だけでは防げまい。アメリカ人のなかには国民皆保険は社会主義だという人がいるが、そうだろうか。

そして、およそ半世紀前のオリンピックの時には、まだほとんどなかった高速道路を走っている車を見てほしい。日本車ばかりが走っていると思うアメリカ人もいるかも知れませんが、ベンツもボルボもたくさん走っています。残念ながらアメリカの車はあまり走っていない。なぜだろうか。

また、日本の進学塾なども見てもらってはいかがだろうか。日本もまた、アメリカ以上の競争社会になっているように見える。しかし、日本人の進学競争は安定を求めた競争であるのに対して、アメリカでの競争はリスクを前提として、チャンスを求める競争のように見える。いかがだろうか。

【終】

10 回にわたり読んでいただきありがとうございました。

---

★ 本連載は田崎清忠先生主催の Writers Studios に掲載された原稿を転載させていただきました。